

## ウナギ産卵生態調査

### 9. 摂餌開始期ウナギ仔魚の形態と食性

望岡典隆（九大院農）・野村和博（水研セ養殖水研）  
青山 潤・篠田 章・塚本勝巳（東大海洋研）  
高橋正知・黒木洋明・張 成年・渡邊朝生（水研セ中央水研）

【目的】2009年5-6月に西マリアナ海嶺南部海域において採捕された摂餌開始期のウナギ仔魚の形態と食性を明らかにする。

【材料と方法】水産庁調査船開洋丸平成21年度第2次航海レグ1において、新月（5月24日）の2-3日前にふ化したと推定されるウナギ仔魚群を5月25日から6月4日にかけて、IONESS（多段開閉式プランクトンネット）およびIKMTで連続追跡することができた。ここでは得られた仔魚110個体（全長3.2-8.1mm）を材料として形態的特徴と消化管内要物を調べた。全長は固定前に測定した。

【結果】新月2日前を孵化日とすると、卵黄および油球の吸収はふ化後6日-8日に完了すると推定され、そのときの全長は3.7-5.1mmであった。腸管の後方が膨らみ、摂餌を開始したと判断された仔魚は5月27日に採捕され、全長は5.0mmで1個の小さな油球がみられた。その翌日に採捕された油球吸収後の仔魚（全長4.9mm）の腸管には2個の粒状物が認められた。両粒状物は茶褐色を呈し、1個は長径75 $\mu$ m、短径25 $\mu$ mの楕円形であった。残りの1個は長さ88 $\mu$ m、幅21 $\mu$ mの湾曲した棒状を呈した。これらの形態および光学的特性は動物プランクトンの糞粒の特徴と一致し、前者はその形状から尾虫類の糞粒の可能性が高いと考えられた。その後、6月3-4日に採捕された仔魚（全長6.1-8.1mm）の腸管には尾虫類の糞粒と思われる粒状物が高頻度で認められた。摂餌開始期の仔魚は水深120-140m層（水温27-28 $^{\circ}$ C）に分布し、昼間に活発に摂餌していることが明らかになった。